

# 經濟論叢

第九十七卷 第一號

## 穂積文雄教授記念號

---

献 辭	岸本英太郎	
日露戦争・第1次大戦間の日本経済	堀江保蔵	1
社会思想一論	出口勇蔵	22
トマス・モア『ユートピア』分析の視角	伊達功	39
島の農業について一覚書	野木稔郎	57
歴史における為政者の役割について	伊藤幸一	75
王安石新法の貨幣的側面	桑田幸三	92
イギリス労働組合運動における1889年	前川嘉一	110
ロックの道德哲学と教育思想	平井俊彦	127

穂積文雄 教授 略歴・著作目録

---

昭和四十一年一月

京 都 大 学 經 濟 學 會

## トマス・モア『ユートピア』分析の視角

—その研究史的考察—

伊 達 功

- I ヨーロッパの研究事情
- II わが国における研究—戦前
- III わが国における研究—戦後

## I

Thomas More (1478—1535) が現代にまで名をとどめているのは、大きく分かって2つの理由がある。そのひとつはローマ・カトリックの守護者としてのかれの宗教的事蹟であり、他はかれが1516年末にラテン語で公刊した有名な国家小説 *Utopia* によるものである。われわれは、主として後者との関連においてモアを問題とするのであるが、従来のモアにかかわる諸研究は、むしろ前者に関連づけられるものが多かった点は注意せられるべきであろう。社会思想史、経済史、経済学史の観点からの研究がおこなわれるにいたったのは、おおむね19世紀の後半に入ってからのことである<sup>1)</sup>。

ところで、社会思想史の見地からもっとも注目すべき研究としては、Karl Kautsky の初期の労作、*Thomas More und seine Utopie, mit einer historischen Einleitung*, 1887 を指摘しうる。本位田祥男先生がかつて指摘されたように、モアとその〈ユートピア〉は、「此の著によって始めて社会思想史に於ける地位が定った」ものである<sup>2)</sup>。カウツキーの詳細にして科学的な分析をひ

1) W. Roper, T. Stapleton, Cresacre More, A. Cayley, W. J. Walter, T. E. Briggett など、古来のモア伝の執筆者は多くカトリックであった。モアは1886年にカトリックの「殉教者」として公認せられ、1935年には「聖者」となっている。ここにヨーロッパにおけるモア認識の重要な基盤があることは、再確認の要があろう。モアの〈ユートピア〉をはじめて経済学の見地からとりあげたのは、おそらく W. Roscher, *Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre*, 1851 である。(大塚金之助「解放思想史の人々」18-19, 47 ページ参照)

とつよりどころとして、現代のわれわれは、モアとその〈ユートピア〉を再検討する機会をもちうるもの、といてさしつかえないであろう。

いうまでもなくカウツキーは、〈ユートピア〉を社会主義の観点から吟味し、それを近代社会主義の最初の宣言とみなすことに力点を置いている。このカウツキー的視角は、しかしながら、今日にいたるまで、厳密な意味での継承者をみいだすことが困難である。Max Beer (*A History of British Socialism*, 1920; *Allgemeine Geschichte des Sozialismus und der sozialen Kämpfe*, 1922)などは、カウツキーにもっともちかい研究者ともくされるが、かれすらも、モアの〈ユートピア〉をもって「教父の倫理学と政治学、およびヒューマニズム哲学を、最大の現世的問題に適用せるもの」と評している箇所がある<sup>3)</sup>。

中央大学田村秀夫先生は、カウツキーの系列に入る研究者として、Russell Ames (*Citizen Thomas More and his Utopia*, 1949)を指摘されたが、先生もその所論のなかで明確に引用されているように、エイムズが主張したモアの近代性とは、「共和主義的、ブルジョア的、民主主義的」したがって「実業家、政治家、エラスムスの改革者としてのモア」であったこと、それゆえ、エイムズがカウツキーを賞揚したとはいえ、かれが強調したのは、この書物の題名があきらかにしめすように、「市民トマス・モア」であった点は、ここに指摘しておく価値があるであろう<sup>4)</sup>。

カウツキー、ペアー、エイムズは、その視角と〈ユートピア〉解釈において、それぞれの独自性を有するものであるが、いずれも〈ユートピア〉の叙述のう

2) 本位田祥男「経済史研究」258ページ。カウツキーの思想と理論をすべて過去のものとしてかえりみない態度には組しがたい。少くともこの書における歴史分析は注目に値する。

3) M. Beer, *A History of British Socialism*, I, p. 34; *Allgemeine Geschichte des Sozialismus*, III Teil, S. 73. しかし、この記述をもってペアーのモア観を中世的と断定することはあやまりである。かれが〈ユートピア〉中における進歩的側面、とくに社会主義的主張に注目し、そこにこの書物の価値をみとめていたと判断される記述は多くみとめられる。なおわが国においては、たとえば森健一(後出)、矢島悦太郎(『概説社会思想史』)先生などにカウツキーの線がみいだされる。

4) 田村秀夫、モア〈ユートピア〉研究序説(一)、57ページ; R. Ames, *Citizen Thomas More and his Utopia*, 1949 p. 6. カウツキーもロンドン商業資本の代弁者としてのモアの思想と活動をたかく評価している(K. Kautsky, *Thomas More und seine Utopie*, 6. Aufl., 1926, Berlin, S. 165 以下)。しかしカウツキーにおいては、その主要な論点が近代社会主義と

ちに「近代性」を発見し、そこにこの書物の価値をみとめたという点では、相互の一致点を指摘しうるものである。ところで、モアと親交のあった同時代の代表的ヒューマニスト Erasmus などは、モアの〈ユートピア〉を、ルネッサンス・ヒューマニズムに立脚するところの政治的意見の表明である、と認識している。〈ユートピア〉を当時の新知識ヒューマニズムの所産とみる見方は、たしかに一般的にも妥当な見解であり、のちの J. Mackintosh (*Life of Thomas More, 1844*), F. Seebohm (*Oxford Reformers, 1867*) など、多くのひとびとによる著作は、この視角にもとづくモア・ユートピア批評として指摘しうるであろう<sup>5)</sup>。

しかしながら、知られるように、〈ユートピア〉解釈にはいまひとつの系列が存在する。それは従来の宗教評論家(カトリック)、および保守的思想家によって代表される認識の視角であって、これによるときは〈ユートピア〉の存在価値は過少評価され、あるばあいには無視せられる。たとえば、最初のモア伝として高く評価されているところの、William Roper の *Life of Sir Thomas More, 1557* ころのなかには、〈ユートピア〉にかんする記述はついに発見されないし、Stapleton のモア伝 (*Tres Thomae, 1588*) のなかでも、〈ユートピア〉については、「しかし、かれはそれが出版されるのを欲せず、ただひとつのなぐさみの小説として、2,3の友人に見せようとしただけである」と、消極的に記述されたにとどまる<sup>6)</sup>。モアの〈ユートピア〉をもってたんに回顧的ないし懐古的な戯作にすぎずとなし、あるいはそれをモアの気まぐれ、たんなる冗談にすぎないものとみなす諸見解については、たとえばカウツキー、

---

〈ユートピア〉との関連におかれていたことはあきらかである。

- 5) Ulrich von Hutten あてのエラスムスの手紙 (K. Kautsky, *op. cit.*, S. 108 以下に全文の紹介あり) にいわく、「モアがユートピアを書いた意図は、わるい国家の本質はなんであるかを示すことにありました。いうまでもなく、そのばあい、かれが徹底的に研究し精通しているイギリスのことを念頭においていたのです。」また、プロテスタントであったシーボームは、「ユートピアを危険であると宣告することは、その真理性を承認することであった」と述べている (Everyman's Library, *Oxford Reformers*, p. 217. 大塚金之助 前掲書 25-26 ページ)。なお前掲田村論文(49 ページ)によれば、K. Sternberg, G. T. Rudhart, C. Jenkins などの著作も同系列にぞくするものである。
- 6) 大塚金之助 前掲書 22 ページ。

大塚先生などの指摘にもあきらかである<sup>7)</sup>。そもそも、ローマ・カトリックの聖者としてモアを固定し、その社会科学的な進歩性を回避せんとするたちばかりすれば、〈ユートピア〉中の所論、とくにその社会主義的主張と進歩的宗教論とはあきらかに不適当な、異端的要素をふくむものとみなされるから、このたちばかりから〈ユートピア〉が意識的に粉飾され、無視される傾向があるのは、けだし当然のことといえるであろう<sup>8)</sup>。

かつてモア研究の權威とみなされた R. W. Chambers (*Thomas More*, 1935) は、この系列における戦前の代表者である<sup>9)</sup>。チェムバーズにしたがえば、モアが〈ユートピア〉中においてなした最重要のことは、当時のあたらしい政治と経済とにたいするプロテスト(復古的要求)にはかならず、また宗教上の記述においてもそれは保守的であり正統的である、と解釈される。それゆえ、モアは中世的秩序の擁護者であり、中世の末期において、かれは宗教を基礎とする規律的、修道院的共同生活、肉体的労働と精神的美的文化の尊重にもとずいて建設された国家をえがいたもの、と解釈されている。カウツキーやエイムズが〈ユートピア〉中から汲みとった近代的進歩性は、ここでは中世僧院的な美德に転化しており、カトリックの政策的な意図が如実にかがわれる。ところで、このチェムバーズの解釈は、戦後においては H. W. Donner (*Introduction to Utopia*, 1945), W. E. Campbell (*Erasmus, Tyndale and More*, 1949), Barbara von Blarer (*Die Briefe des Sir Thomas More*, 1949) などによってうけつがれている<sup>10)</sup>。それらは要するにカトリック的、保守的視角よりすると

7) K. Kautsky, *op. cit.*, SS. 316-317. そこでは G. T. Rudhart, *Thomas More, 1829* および A. Stern, *Die Sozialisten der Reformationszeit, 1883* を指摘。大塚金之助 前掲書 22-24 ページ。そこでは Everyman's Library 版 'Utopia' への John O'Hagen の序文、ドイツの *Frankfurter Zeitung*, イギリスの *Times' Literary Supplement* および *Manchester Guardian* などに掲載された諸家の批評を引用、指摘。

8) 1930年代に、カトリックのがわからのモア・ユートピア論が多くあらわれているのは、当時おこなわれたモアおよびフィッシャーの「聖化」に関係があるとおもわれる。モアの「聖化」を実現するためには、〈ユートピア〉がカトリックの教義と抵触しないことを証明する必要があった。W. E. Campbell, *More's Utopia and his Social Teaching*, 1930; C. Hollis, *Sir Thomas More*, 1934; R. W. Chambers, *Thomas More*, 1935 などはその著例である。

9) 田村秀夫 前掲書 53-54 ページ 参照。

10) 田村秀夫 前掲書 54-56 ページ 参照。このうちキャムベルは 1930 年に著書を出しており(註 8)、戦前からの継承者である。

ころのモア・ユートピア批評にほかならないものである。

現代社会思想史的見地よりして〈ユートピア〉をとりあげるばあいにおいては、右の視角はむしろ重要ではない。そこでは、カウツキー、ペアー、エイムズの視角こそが重視せられるべきである。しかしながら、そのばあいといえども、従来のカトリック的モア・ユートピア観を無視することは危険であろう。この保守的視角が〈ユートピア〉の進歩性を否定したゆえにその真の価値を見うしなったように、この書物のもつ中世的性格に目をつぶることは、かえって〈ユートピア〉の真理性——その科学的分析と理解——からとおざかることになるであろう。われわれは、カウツキーですら、しばしば〈ユートピア〉の後進性と封建性を指摘した態度を想起しなければならない。

上述の観点からもっとも注目すべき研究が、1952年 J. H. Hexter (*More's Utopia*) によってこころみられている<sup>11)</sup>。かれの視角は「第3のパスベクティヴ」として象徴的に表現されているが、それは要するに、モアにおける近代性と後進性、その二重的性格を、〈ユートピア〉の叙述そのもののうちから、統一的に包摂しようとするこころみである。ヘクスターは、従来のモア・ユートピア解釈、評価が主観的、恣意的になされてきた点をするどく指摘し、この傾向を是正するために、モアがこの書物を書いた当時の情況にたちかえって、その構成を再吟味し、モア自身の真意に即してそれを理解すべきことを主張する。このかれの努力はさいきんの諸論文においても発展的につづけられているが、卑見によれば、この視角と方法こそが、現在以後のモア・ユートピア研究においては、もっとも重視せられるべきである<sup>12)</sup>。

11) ヘクスターの *More's Utopia* については、前掲 田村論文 58-59 ページ、および同先生の書評 ヘクスター、モアのユートピア、『経商論纂』第53号、1953年、109-116ページ 参照。

12) ヘクスターは、さいきん出版された *The Yale Edition of The Complete Works of ST. THOMAS MORE, Vol. 4, 'UTOPIA'*, 1965 の *Introduction* として、'The Composition of Utopia', 'Utopia and Its Historical Milieu' なる 2 論文を寄せている。1952年におけるかれの 'More's Utopia' とさいきんの論文とのあいだには発展的变化がみとめられる。この点については、なお両者の詳細な比較、検討が必要であるが、その 1 部、およびヘクスターの〈ユートピア〉分析にたいする批判については、拙論、トマス・モア〈ユートピア〉研究序説——その問題点と方向づけについて——、『松山商大論集』第16巻第4号、昭和40年10月を参照されたい。

## II

戦前、わが国においてもっともはやくモア研究を手がけられたのは高橋誠一郎先生であろう<sup>13)</sup>。その最初の論文「トーマス・モアのユートピアとその共産主義的思想」は1919年(大正8年)に発表せられている。ところで、現在、筆者の手もとにあるただ1つの資料「経済学前史」中の記述によってみれば、先生の〈ユートピア〉観は、進歩的であるよりもむしろ回顧的であったと判断される。たとえば先生は、モアの共産主義をもって、「英国社会の営利主義的傾向によって将さに亡びんとしつつある共同体の生活の悲哀」の反映として指摘されており<sup>14)</sup>、さらにつぎの記述がある。「然れどもモアは、其の理想郷たるユートピアを典型として社会を改革し、改造する可能を信じたものに非ず。彼れは自ら、自己の理想郷的改革の到底実行し得ざるを暗示しつつあるなり。即ち彼れは将さに擱筆せんとするに当って曰く、『余はユートピア国に於いては、我れ等の国家に於いては之れを期待するよりも、寧ろ羨望すべき幾多の事物存するを自認せざる可らず』と。彼れは彼れの時代が未だ斯くの如き徹底せる改革を容るるまでに成熟せざるものなることを何人よりも善く知悉せり。而して彼れは、尋常一様の人類の間にユートピア的理想に基礎を置ける国家の建設を劃するは、殆んど如何なる時代に於いても等しく幻想たらざるを得ざることを認めつつありしなり。』<sup>15)</sup> 高橋先生の研究は経済学史、社会思想史のたしにたつものであり、チェムバーズ的視角とは異質のものであるが、しかも、そ

13) 高橋誠一郎先生の〈ユートピア〉文献にはつぎのようなものがある。トーマス・モアのユートピアとその共産主義的思想。『三田学会雑誌』第13巻第4-6号、1919年4-6月；ユートピア管見、同上 第24巻第8号、1930年8月；『経済学前史』改造社 1929年 715-723 ページ；『重商主義経済学説研究』改造社、1932年中の記述。

14) 高橋誠一郎「経済学前史」716ページ。

15) 高橋誠一郎「経済学前史」722-723ページ。なお先生は、モアの外交、戦争政策を評して「内に対して共産主義者たるモアは、外に対して一種の資本主義的侵略主義者たるを見る」(721ページ)と述べ、「吾人は彼れに於いて亦た早くマーカンチリストの一面を認むるなり」(同ページ)と指摘されている。またべつ箇所では、ユートピアの人口政策を紹介しておられる(684-685ページ)。大塚先生の短評によれば、「氏の特色は、詳細な資料の訳出および紹介にあり、〈ユートピア〉の社会主義的解釈に反対しつつ、第2部の紹介にくわしいことである」とある(大塚金之助 前掲書 48ページ)。

の回顧性の強調という点では相互の一致点を見いださうのものである。

高橋先生について〈ユートピア〉にかんする研究を發表されたのは本位田祥男先生である<sup>16)</sup>。先生は経済史家として、とくに〈ユートピア〉第1巻中におけるイギリスの経済状態の記述、なかんずく囲い込み運動（先生のいわゆる綜劃運動）に注目しながら——したがって〈ユートピア〉を1つの歴史的文書として把握しながら——論をすすめておられる。大塚先生も指摘されたように、この点にこの研究の特色がみられる<sup>17)</sup>。ところで、〈ユートピア〉の目的意識にかんしてはつぎの記述がある。

「何故彼はかくの如きものを書いたのであらう。或はプラトー研究の記念塔であると云ふ。然しリパブリックは理論より出発してゐるに對し、之は現実の要求から其の政策を求めてゐる。或は原始基督教的の共產主義への単なる回顧であると云ふ。然し前者とは異つた国家的生産手段の社会化と云ふ精神的な主張を持つてゐる。況んや単なる概念の遊戯とするには余りに熱情が籠つてゐる。カウツキーも云ふ如く、英國の現状に鑑み、夫を如何に改良すべきかを書いたものと見るのが至当である。（エラスムスのユートピア評を紹介したのち——引用者）其の他理想的組織として描いた宗教、健康、外交、土地の形状等を書くに際して、常に英國の夫を對象とした事が明かに現れてゐる。』<sup>18)</sup>すなわち、先生によれば、イギリスの現実批判が〈ユートピア〉著述の目的であつたとせられる。この視角は高橋先生に比して進歩的である。さらに先生は、カウツキーと同様社会主義的視角についてもふれておられる。すなわち、「かくの如く多くの社会的不合理を検討して、彼は其の根本を私有財産に認めた。『私有財産のある所、貨幣が威張つてゐる所に（where money beareth all the stroke）公共の幸福が正しく治められ、有望に榮える事は殆ど不可能である』としてユートピアを説いたのだ。……此の立場から綜劃運動にも反対したのだ』<sup>19)</sup>と。しかし、

16) 本位田祥男、*Thomas More: Utopia* を通して見たる当時の経済状態、「経済学論集」第4巻第4号、1926年4月、「経済史研究」三省堂、1935年、255-285ページに収む。

17) 大塚金之助 前掲書 48ページ。

18) 本位田祥男 前掲書 261-262ページ。エラスムスのユートピア評については(註5)参照。

19) 本位田祥男 前掲書 282ページ。



またつぎのような記述もみられる。「又（モアがユートピア中において）かくの如き社会主義的解決を与へた事自体が、ウィクリフ以来、英国に資本主義文明の浸潤に対し、中世を確立しようとする苦悩と運動の漲つてゐた事を示してゐる。殊に独逸のミュンツァー等の動乱が同じ日標の下に之と前後して起つた事は、当時の欧州の空気を雄弁に物語つてゐるには違ひないが。」<sup>20)</sup> 先生も〈ユートピア〉の記述のうちに中世的色彩を読みとられたのであろうか。ともあれ、先生の主たる関心がイギリス経済史にあったことは、この論文の題名よりしてあきらかなところである。

さいごに、大塚金之助先生の研究については、これまでにしばしば引用した事情からもあきらかであるように、〈ユートピア〉の文献学的、研究史的紹介、批評に重点がおかれており、また、モアの生活歴と業績との簡潔なデッサンとしても有益である<sup>21)</sup>。ところで、〈ユートピア〉が書かれた意図にかんしては、主としてカトリック的、保守的見地と、エラスムスのヒューマニズムの見地よりする諸批評が紹介されている<sup>22)</sup>。しかしながら、論者自身の〈ユートピア〉分析の視角はかならずしも明瞭ではない。たとえばつぎの記述がある。「私たちは、主として、発掘された公記録、モア自身の著作、手紙、および同時代人のいつわらない意見によって、その意味を見定めるようにしなければならない。」<sup>23)</sup> 「〈ユートピア〉の主観的意図をもっともあきらかに語っているのは、この書物の最初の組立てと内容とであり、それよりさらに重要な、その客観的意義をたしかめるのは、15—16世紀境の西ヨーロッパおよびイギリスの歴史的諸事実の意味である。」<sup>24)</sup>——しかし、この叙述からは、その具体的な結論を把握しがたいうらみがある。ただ、この論文の全体から推しはかるならば、先生の

20) 本位田祥男 前掲書 263ページ。

21) 大塚金之助、トマス・モア、「改造」1935年、7月号；「解放思想史の人々」岩波新書、1949年、17—56ページに収む。

22) この論文の後記に「イギリス経済史に関する部分、およびモアの社会主義思想史上における評価について従来の研究家の意見を調べる部分は、この稿には入れなかった。……本稿の各節は、もっと詳細に論ずるはずであったが、ここでは、果すことができなかった。各節とも非常に不十分である」と記されている。

23) 大塚金之助 前掲書 20—21ページ。

24) 大塚金之助 前掲書 26ページ。

視角が〈ユートピア〉のカトリック的、回顧的な解釈にたいして相当に批判的であったことは、ほぼ確実である。〈ユートピア〉の経済学史的意義については、この論文のさいごにつきのように述べられている。「このあいだにあって、モアの地位を特色づけるものは、本源的資本蓄積過程の最初の大衝撃を眼前に見て、当時のイギリス貧民発生の特種的原因を土地囲い込みにありとした点にある。最初の資本はどこから来たか、貧民はなぜ発生したか——この問題は、イギリス経済学が取り扱わなければならない重大な問題の1つであった。モアは、右の過程の1つとしての土地囲い込み運動のいつわらざる観察者として、経済学史上にその地位をたもっているのである」<sup>25)</sup>と。

以上われわれは、3人の先覚者のモア・ユートピア批評を概観した。おなじく経済学ないし社会思想史的分野からの研究でありながら、その評価のニュアンスがそれぞれことなっているのは注目される点である。

### III

戦後においては、ヨーロッパ、アメリカでも Donner, Gray, Campbell, Amcs, Hcxtcr, Reynolds, Surtz など多くの学者、研究者によってモア研究が進められ<sup>26)</sup>、その影響をうけてわが国の研究も発展した。まず、戦後わが国ではじめてモアをとりあげられたのは竹内幹敏先生（当時小石川高校講師）である<sup>27)</sup>。先生は「モアのヒューマニズムとカトリシズムとのふたつの契機を、それらの歴史的 성격において統一的に理解する」ことを課題とされるが<sup>28)</sup>、そ

25) 大塚金之助 前掲書 54-55ページ。先生がここで、モアを「囲い込み運動のいつわらざる観察者」といわれ、「するどい分析者」あるいは「原因の究明者」などと評しておられないのは、学史上のモア評価として示唆的である。

26) 既述いがいの著述をあげれば、つぎのとおりである。A. Gray, *The Socialist Tradition*, 1946; E. F. Reynolds, *Saint Thomas More*, 1953; E. Surtz, 'Utopia as a Work of Literary Art' 'Sources, Parallels, and Influences' 'Editions of Utopia' ('Introduction' to *The Yale Edition of The Complete Works of ST. THOMAS MORE, Vol. 4 'UTOPIA'*, 1965)。なお、モア・ユートピア主要文献については、前掲拙稿 末尾 参照。

27) 竹内幹敏。トマス・モアにおけるヒューマニズムとカトリシズム、「思想」1950年、11月号、44-56ページ。

28) 竹内幹敏 前掲書 44ページ。先生はこれを「モアにおけるヒューマニズムとカトリシズムとの交錯」と表現されている(44-45, 47, 49, 54ページ)。この論文にかんしては、水田洋先生の「サー・トマス・モアと社会主義」中にくわしい批評がある。

の観点がヨーロッパの伝統的視角、すなわちカトリシズム的モア・ユートピア観の継承であった点は注目にあたいる。したがってそこには、モアにおいて本質的重要性をもったものはカトリシズムであってヒューマニズムではなく、ヒューマニズムはモアにおいてはあくまで付加的要素にすぎないものであったという推測が、その大前提（あるいは当然の帰結）として用意されているのである<sup>29</sup>。このような視角よりすれば、〈ユートピア〉の価値が過少評価されるのは当然である。論者は、チェムバーズ、ホリスなどの所説をそのまま採用して、〈ユートピア〉第2巻の叙述をたんなる幻影、仮構にすぎずとなし、それは、カトリシズムの見地よりするとところの現実社会にたいする批評、慨嘆として見るかぎりにおいて意味があるとされる<sup>30</sup>。したがって、〈ユートピア〉の叙述を無条件に自由な近代思想のさきがけとみなすたれば、および、それをたんなる白日夢とみなすたればにたいしては、ともに反省が要求されている。さらにまた、高橋先生同様、モアのさいごの章句（ユートピア懐疑論）を根拠として、〈ユートピア〉におけるモアの叙述が「仮構の設定であって政治的信条のひとつではないことが告白されている」ものと判断され、さらに「のちの著作があきらかに語るように、コムニズムは結局かれの思想にならなかったし、かれが現実にはイギリス商業資本の利益を代表しているかぎり、その実現はのぞむべくもなかった」ものと述べられている<sup>31</sup>。また、しばしば問題となるモアの宗教的〈寛容〉については、その存在を弁護するカウツキー説に反対して、それは「ただしくない」と断定し、「新旧両徒のはげしい相剋のながい歴史のうちに、近代の思惟が見いだした宗教上の〈寛容〉の規範は、かれの論理のなかには存在していなかった」ものと解釈せられる<sup>32</sup>。そして結局、ローマ・カトリ

29) 「事実、ユートピアにおいてヒューマニズムにおおわれたカトリシズムの精神が、その発展する宗教改革の激動に關聯して、その本質を明瞭にあらわしたまでであり、それとともに、そのヒューマニズムの精神は背後におしやられてしまったのである。」（竹内幹敏・前掲書 53ページ）。

30) チェムバーズ、ホリスの〈ユートピア〉評については、竹内論文 84 ページ 参照。なお竹内先生が引用された外国文献はすべて戦前のものにかざられる。

31) 竹内幹敏 前掲書 49ページ。

32) 竹内幹敏 前掲書 53ページ。

ックの教義において全生活の支柱をみいだしたモアの歴史的役割は、かれの刑死とともに終わったものと結論せられているのである。

竹内先生の所論は、カトリシズムを軸としたモア・ユートピア批判であるが、モアにおける宗教的寛容の存在を否定し、その歴史的意義の終えんを指摘するあたり、その基調にはプロテスタント的モア批判の傾向が示されている。いずれにしても、その明快な論理の展開と深刻な批評とは、ことにこのような視角からのモア研究にとぼしいわが国においては、注目すべきものである。

ついで1951年には、名古屋大学水田洋先生の研究が発表されている<sup>33</sup>。この論文は、戦前の動向にくわえて、戦後におけるモア研究の最新の傾向を、わが国においてはじめて多角的に紹介、批評されたものとしては、戦後におけるモア研究のバイオニア的意義を有するものであり<sup>34</sup>、かつ、〈ユートピア〉第2巻の簡潔な紹介、批評においてもすぐれている<sup>35</sup>。戦後におけるわが国のモア・ユートピア研究は、ここに1つの源泉をもつというべきである。

ところで、ここでとりあげられた主要問題は、モアにおける社会主義をいかに把握し理解すべきであるか、であり、先生の結論的視角は、当時の歴史情勢の分析、具体的には商業資本＝絶対王政の歴史的矛盾の分析を土台とするところの理解への接近の仕方であった。この商業資本分析の作業は、のちにエイムズの視角において、田村先生によってはたされているが、この論文において、その問題提起がなされているのである。田村論文についてはのちにふれるが、当時の商業資本＝絶対王政の歴史分析からモアの共産主義に接近するというこの方法は、はたして完全に成功するであろうか。それが一般に〈ユートピア〉解釈における必要条件であることはいうをまたないが、けっして十分条件では

33) 水田洋、サー・トマス・モアと社会主義、「経済科学」IV, 1951年, 36-65ページ。

34) 水田先生が紹介、批評されたのはつぎのひとびとである。——K. Kautsky, M. Beer, W. E. Campbell, A. Gray, R. Amos, P. M. Sweczy, B. Russell, 高橋誠一郎, 大塚金之助, 平井正穂, 竹内幹敏, 中野好夫。

35) そこででは内容の分析、批判よりも紹介に重点がおかれている(ただしユートピアの共産制と侵略戦争にかんする部分は省略)。ことに高橋先生の著書が入手困難な現在では、その価値は高いものである。

ない。モアがルネッサンス・ヒューマニズムの影響のもとに〈ユートピア〉を書いたことはあきらかであるから、そこには当然に古代ギリシャ思想の反映という事情が考慮されねばならず、カトリックの影響もみのがすことのできない条件である。

この論文は〈ユートピア〉の根本的諸問題にふれたものであるが、その「要約」においてはつぎのようにまとめられている<sup>36)</sup>。まず社会主義の問題については、「ヒスロディのものがたる〈ユートピア〉が近代社会主義のユートピアからかなりへだたっていることは、すでにあきらかであろう」と指摘され、第1節において中心的課題の1つとなったモアとヒスロディとの関連については、両者は「同一でもなく、無かんけいでもなく、分離のうで統一して理解すべきである」といわれ、さらにモアと王権との関係については、「絶対王政にたいするうしろむきの批判が、かれの立場ではなかつたろうか」と推定されている。さいごにモアのえがいた理想境については、「封建的な専制と分裂から絶対主義の統一への中間の、調和的な独立生産者の社会が、かれの理想であったように思われる」と述べておられる<sup>37)</sup>。これらの諸判断は、モアの〈ユートピア〉を進歩的とみなすよりも、むしろうしろむきのものともみなすたちばの表明と解釈されるが、しかし全体として、そこでは〈ユートピア〉にかんする社会思想史上の重要な問題提起、課題の提供がなされたものといえるであろう<sup>38)</sup>。

つづいて1953年には、中央大学田村秀夫先生の「研究序説」が発表されている<sup>39)</sup>。この論文は、従来の〈ユートピア〉研究の視角を豊富な諸外国の文献・資料を駆使して系統的に紹介、批評し、かつ論者の見解を述べたものとして、わが国のモア・ユートピア文献中もっとも注目すべきものである。その一部に

36) 水田洋 前掲書 63-65ページ 参照。

37) このさいごの指摘は、のちの水田洋・水田珠枝「社会主義思想史」東洋経済新報社、1958年においては、いっそう詳細になされている(42-43ページ参照)。フォーアスキーとモアとの対比は、すでにマルクスが「資本論」第1巻第24章(長谷部訳 青木書店版 1099ページ)で指摘しており、前掲大塚論文でも、両者のえがいたその当時のイギリス社会が、対照的に比較されている(48-50ページ 参照)。

38) この論文は「すべては課題としてのこされている」ということばで結ばれている。

39) 田村秀夫、モア〈ユートピア〉研究序説—ユートピア 解釈の基本問題—、「経商論纂」第49号、1953年、30-62ページ。

についてはすでに引用したが、〈ユートピア〉分析の視角についての論者の見解はとくに重要である。すなわち先生は、〈ユートピア〉の近代性と後進性——二重性を、当時の社会の過渡的な性格の反映として理解し、したがってこの著述は、そもそも近代と中世という二重的な性格をそなえたものとして成立している点を指摘せられる。従来モア・ユートピア解釈が多岐にわかれたのは、そのいずれの側面に注目し、そのいずれの場面を強調するかを選択において、さまざまなたちばがあったからにほかならない。したがってわれわれの任務は、「中世と近代とを媒介する、このような過渡的な二重性をもつものとして〈ユートピア〉を捉え、その歴史的社会的な性格を明かにすること」であり、それが「〈ユートピア〉解釈の基本問題となるであろう」と指摘されている<sup>40</sup>。

うえの見解はヘクスターにちかいものである。水田論文に2年おくれて発表されたこの論文（および後続論文）は、その間に、ヘクスター、エイムズという2人のすぐれた研究者の成果を検討する機会にめぐまれた。この点に田村理論展開の重要な基盤があったとみられる。

田村先生は、ひきつづき1954年に「研究序説」の続編を発表されている<sup>41</sup>。この論文は主として〈ユートピア〉第2巻に準拠し、ユートピア社会の制度的背景をイギリス商業資本との関連においてとらえながら、両者の吻合を歴史的に論証することに主眼点がおかれている。この観点ばエイムズにちかいものである。ところで先生は、モアのえがいた理想社会が当時のイギリス社会を理想化したものであり、とりわけ商業資本の拠点となった自由都市（ことにロンドン）をモデルにした、という判断を前提としておられる。しかし、このような解釈が採用されるにいたった積極的な意味は、かならずしも明瞭であるとはいえない。すなわち、ユートピア社会の背景は、これを当時のイギリス自由都市に設

40) 田村秀夫 前掲書 61ページ。この論文における〈二重性〉とは、近代と中世との分岐点という、当時の歴史的時点の特殊性を指す。しかし、〈ユートピア〉がルネッサンス・ヒューマニズムの所産であることを考慮すれば、そこには当然ギリシャ古代という歴史的時点への配慮が必要となるであろう。さらに二重性を矛盾の意味に理解するならば、〈ユートピア〉中には、近代と中世との時代的矛盾ということ以外にもそれを指摘しうる。

41) 田村秀夫、モア〈ユートピア〉研究序説二—〈ユートピア〉の性格—、「経商論叢」第58号、1954年、36-64ページ。

定しないで、たとえばそれを古代都市国家にもとめることもできるし、中世封建社会にもとめることもできる。あるいはこれを未来の社会主義社会に設定することも不可能ではない。そして、このような選択可能性のうちにこそ、いうところのモアの〈二重性〉は指摘せられるべきである<sup>42)</sup>。論者の分析の要点は、当時のイギリス商業資本が内包していた進歩性と後進性のうちに、ユートピア社会の過渡的・二重性を指摘するところにもとめられるが、しかりとすれば、それは〈ユートピア〉の多面的な全内容からみて、重要ではあるがあくまで部分的な視角からなされた解釈というべきであろう。右のような批判は可能であるにしても、田村論文は、わが国における〈ユートピア〉文献中もっとも注目すべきものの1つである。

つぎに問題とすべきは長崎大学岩松繁俊先生の研究である<sup>43)</sup>。先生は、現代的な経済学の成果よりみて、「モアの経済分析の技術（〈ユートピア〉）のなかに経済学的構想が断片的にであれ存在するものと前提して）が、当時のイギリス社会における経済状態をどれほど経済学的な意味で正確にとらえているか」を問題とされる<sup>44)</sup>。これは、経済学の見地からモアをとりあげるばあい、ぜひともはたされなければならない重要な課題であり、それゆえ貴重な分析の視角である。

ところで先生は、結論的には、「謹厳にして信仰あついモアには、眼にみえ

42) 「モアが近代的に思考したのは、彼と商業資本との内的結合に帰せられる」というカウツキーの判断が示されている（『序説』(一)、61ページ）。しかし、またたとえば、『序説』(二)で Hertzler を指摘されたように（46ページ註37）、ユートピア諸制度の原型は、これをギリシャの古代都市国家にもとめることもできる。また、モア当時のイギリス社会という視野で観察するとき、その社会経済的実力者として抬頭しつつあった商業資本を軸とする考察の方法はただし。しかし、そのばあいといえども、理論的には、当時の二大権威であったカトリック（宗教）、絶対王政（政治）を軸とした〈ユートピア〉解釈も同時に可能であるだろう。さらに、イギリス商業資本を土台とするばあい、ユートピア社会の産業構造にかんする叙述が、当時のイギリスの現実と比して劣った点のみみられるのは、問題となる点である。

43) 岩松繁俊、経済分析の視角からみたトマス・モア〈ユートピア〉、『経営と経済』第80-81号、1959年12月（69-91ページ）、および1960年2月（105-134ページ）上・下。この論文はかつての本位田先生とひとしく、分析の焦点を〈ユートピア〉第1巻におき、とくに囲い込み運動にかんする考察がくわしい。また〈ユートピア〉中にあらわれる貴族、紳士、従僕などの社会的性格にかんして、すこぶる詳細な歴史学的な考証がなされており、かつ〈ユートピア〉をラテン語原典から既解して諸訳との点検がおこなわれている。こうした点できわめて精緻な研究である。

44) 岩松繁俊 前掲書 上 70ページ。

た経済現象を分析する能力はあっても、かくれた経済現象をえぐりだし分析する感覚にはいまだめぐまれていなかった」ものと指摘されている<sup>45)</sup>。また、とくに問題とされる囲い込み運動についても、「インクロージュアの原因いかんについてモアの述べるところは、経済分析上なんらの意味ももたない」ものであったと述べられる<sup>46)</sup>。さらに封建家臣団の解体についても、「これを盗人の大量生産とみて、プロレタリア大衆の創造として把握できなかった」点があげられ<sup>47)</sup>、また、当時の経済的不平等の因として、富裕階級の貪欲など観念的な要素が強調されている点が指摘されている<sup>48)</sup>。モアの慧眼を証すべき記述はみとめうるにしても、結局、「政治と宗教のなかに経済的思考がうずもれていた16世紀の初頭において、本源的蓄積期における失業者（とくに非有意的失業者）の創造をとらえた功績」こそが、モアに帰せられる最大のものである<sup>49)</sup>。——以上が先生の分析の要旨である。それはモアの経済学的分析力を否定的に論じたものであるが、この評価は客観的妥当性を有するものというべく、筆者自身もこの見解を持している。

つぎには、早稲田大学松田寛先生の研究があげられる<sup>50)</sup>。現在までにみられる諸論文をとおして、〈ユートピア〉にたいする基本的な視角は、たとえばつぎのように述べられている。「結論的にいえば、吾々がモアにおいて見出すものは、思想的にはカソリック・ヒューマニズムであり、時代的背景においては、封建社会と資本主義社会の初期形態との共存の過渡的性格に示されるものであろう。其処に、彼の示す経済社会の把握の方法の特徴が示されている。」<sup>51)</sup>これ

45) 岩松繁俊 前掲書 上 83ページ。当時資本主義経済のメカニズムは、いまだ「かくれた経済現象」の部類にぞくしていた。

46) 岩松繁俊前掲書下123ページ。この結論がみちびかれるまでの経済学的分析は、モアの叙述と現代までの諸学説とを援用して、すこぶる詳細、綿密である。

47) 岩松繁俊 前掲書 下 121ページ。

48) 岩松繁俊 前掲書 上 81ページ。

49) 岩松繁俊 前掲書 下 124ページ。この評論は大塚先生にちかひ。またこのような結論は、カウツキーのモア近代社会主義者説にたいして有力な反証となる。

50) 松田寛、モア〈ユートピア〉解釈の一試論、早稲田大学教育学部「学術研究」7、1958年。モア〈ユートピア〉における経済観念の断片をめぐって、同上、8、1959年；モア・ユートピア島の分析的素描(1)、同上、12、1963年；モア・ユートピア島の分析的素描(2)、同上、13、1964年。

51) 松田寛、モア〈ユートピア〉における経済観念の断片をめぐって、149ページ。



は、従来の諸説を通じてもっとも標準的な評価といえるであろう。ところで、先生の研究で注目すべきは、「モア・ユートピア島の分析的素描」と題するさいぎんの論文である。これは、モアがえがいたユートピア島の諸物を、現代社会諸科学の成果にてらして、詳細綿密に（ミクロ的に）分析・検討し、かつそれらを現代的な意味で拡大的に再現しようとする意欲的な労作である<sup>52)</sup>。これまでの2つの論文では、ユートピア島の地形、都市、農場、人口等にかんしてモアの述べたところを、うつくしい図型と綿密な計算にもとずいて再現し、その価値を現代的な意味で再確認しようとしておられる。その分析がミクロ的であることは、その意味でのかたより（マクロ的観察の不足、その推理がモアの時代およびモア自身の思考の限界を越えて発展する傾向）をとまなうことがあるにしても、右のような〈ユートピア〉分析の視角は、まことにユニークなものとして注目にあたいする。

さいぎんの研究としては、さらに、東北学院大学森健一先生、および拓殖大学市川泰次郎先生のもものがあげられる<sup>53)</sup>。森先生の論旨は、社会思想史の見地からカウツキー的モア・ユートピア論を展開しながら、それにカトリシズムの影響を導入したものと、いえるであろう<sup>54)</sup>。カウツキーがモアの思想は本質的には近代的なものであったと指摘したにたいし、論者はモアにおける社会主義の根源を、もっとも中世的なカトリック信仰にもとめられたところに大きな相違点がみとめられる。市川先生の研究は、主として〈ユートピア〉における政治的、社会的秩序の維持の観点から、その指導、支配の形態がいかにあるかを追求されたものである。そこでは、ユートピア島における不自由さ、規律の厳格さが指摘されている。なお同年、松川昇太郎先生の研究がでているが、これ

52) この論文は、1. 地形 2. 都市 3. 政治制度 4. 農場 5. 人口 6. 農業 7. 工業および職業一般 8. 労働時間 9. 商業貿易 10. 階級および奴隷の10章にわけられており、目下、第5章まで発表されている。

53) 森健一、トマス・モアにおける社会主義とカトリシズム、「東北学院大学論集」第44号、1963年、73-93ページ；市川泰次郎、トマス・モアの〈ユートピア〉における指導の構造、「拓殖大学論集」第38号、1964年、25-34ページ。

54) 論者はカウツキーと同様、モアの「ふかい経済の認識」を承認しておられる(79ページ)。なおこの論文は、その形式においては、前述竹内論文の「交錯」理論を想起せしめる。

は英語学ないし英文学の視角からの労作である<sup>55)</sup>。

以上、モア・ユートピアの研究史を通観してまず指摘できることは、ヨーロッパ（アメリカ）の研究においては、ヘクスターの批判と方法とが重要な意味をもつということである。わが国においては、宗教的には第三者的地位にあり、社会主義思想の発達においても後進国であるために、その意味での弊害はあらわれていないが、その反面、〈ユートピア〉研究の視角がそれぞれの専門分野からの局限された領域にとどまる傾向がみられる。それはそれとして意味があるが、すくなくとも現代社会思想史の見地からこの課題にとりくむばあい、モアの〈ユートピア〉にふくまれる全内容を、ヘクスターの批判と方法とをとりいれたうえで、刻明に分析、検討するという努力がなされるべきであろう。当時の歴史情勢の諸分析、モアの全生活歴の検証にかんする諸研究は、15—16世紀の世界史的、および英国史的重要性の見地とあいまって、高度の発達をとげている。しかるに、モアの〈ユートピア〉自体は、その内容における多様性と複雑性、歴史的のみならず論理的な諸矛盾の存在のゆえに、これを統一的視角において整序的にあつかうことには、多くの不便と困難がともなうものであり、それゆえに、うえに述べた意味での〈ユートピア〉分析という作業は、いまだきわめて不十分にしかはたされなかったものである。それゆえ、この書物が、近世ユートピア思想のかがやける星として認識せられるかぎり、その内容を、理念としてのユートピアの視角において——歴史的な意味でのユートピア思想はすでに克服されたものである——思想史的に再検討するという作業が、未開拓の研究領域としてのこされているというべく、筆者の近著「トマス・モア ユートピア研究」は、右のような問題意識にもとづいて書かれたものである。

さらに、モアの全著作体系のうち占める〈ユートピア〉の位置と性格という課題がのこされているが、これは現在出版中のエール大学版 *The Complete*

55) 松川昇太郎、Robynson 訳 *Utopia—文法堂書—「人文研究」* 26, 1964年。英文学の見地からは、沢田昭夫「トマス・モア」有斐閣、1959年があげられるが筆者は未読である。

*Works of ST. THOMAS MORE* の完結によって十分可能となるであろう。この問題提起はすでに水田洋先生によってなされているが<sup>56)</sup>、いま、その結果について推測を許されるならば、モアの主著（とくに宗教上の諸著述）を系統的に調査することによって、思想史上のモアの価値を増進せしめるという効果は期待うすいものであろう。むしろその逆の効果こそが、この調査のいっそうありうべき結論であると思われる。そのことは、1518年モアがヘンリー8世に仕えて以後の、かれの後半生の実践活動によってもあきらかに推定しうるところである。この問題については、ヘクスターの見解がきわめて示唆的である。かれはマキャベリとの対比においてモアをとりあげ、結局つぎのように述べる。「モアが〈ユートピア〉を書いてから）ほとんど20年後に、あるいはほんの2年後にさえも、かれがこの書物を書いた当時保持していたすどい知覚力の要素においてすべての事物をみたごとくに、それらをみたと信ずる必要はない。」<sup>57)</sup>ヘクスターは、人生の一時期が、天才的ひらめきの高揚期として、あるひとびとに偉大な業績をなさしめる可能性を指摘し、モアの〈ユートピア〉は、マキャベリの〈君主論〉とひとしく、まさにそうした時期における非凡な成果にほかならぬものである、と論ずる。一般に、一時的な天才によってうみだされたものといえども、その産果そのものは、生産者のその後の生活のいかんにかかわらずなく、1つの社会的価値として存在すべきものである。トマス・モアの〈ユートピア〉にたいするばあい、右のような認識の視角はたしかに有効であろう。しかりとすれば、社会思想史の見地よりするモア研究において中心的課題となるべきものは、あくまで〈ユートピア〉の内容分析、およびそれが書かれた当時の歴史的、社会的諸環境の吟味でなければならない。しかも、とくに前者についての総合的研究は、いまだ未開拓の分野としてのこざれているのである。

(1965.10.)

56) 水田洋 前掲書 37ページ 参照。

57) J. H. Hexter, 'Utopia and Its Historical Milieu', p. xxvii. なお、ヘクスターの所論については、拙稿、ヘクスターの〈ユートピア〉論、「松山商大論集」第16巻第6号、昭和41年2月発行予定を参照されたい。